

にチャイや噛みたばこ（タバコの葉と石灰の混合物を口に入れて、ガムのように噛む）を味わいつつ、スーフィズムについてはもちろん、お互いの家族の話などをした。一度は道場の近くに住む、ヒンドゥー教の司祭の家に遊びに行ったこともある。宗教の違いはあるけど、仲の良い友達とのことだった。

さて、実は報告者には調査をするまで、心配していたことがあった。それは「外国からいきなりやってきて、ただ写本の写真を撮って、さっさと帰っていく」みたいな感じにはしたくない、ということだ。やはり相手の生活空間に立ち入り、大切にしているご先祖様の形見に触れるわけなので、最大限の尊重と

感謝の意をもって接する必要があるし、私からも何かを提供したいと思っていた。今回の滞在中にともに語り、食事し、時々バイクで街を走り回ったことが、相手にとっても楽しい思い出になったことを願ってやまない。もちろん、子孫の方とは今でもSNSでやり取りを続けている（今この原稿を書いているときも、ビデオ通話がかかってきた）。

現地にいる間に収集した写本を読んでいると、日本にいながら、現在のインドはもちろん、写本がつくられた当時とも自分がつながっているように感じる。この感覚を楽しみながら、難解な思想書を今後も読み解いていきたい。

フィールドを決める

—私、この町が好きです—

岩井華代*

「いい町がみつかるといいね」

これは、宮崎駿監督作品『魔女の宅急便』において、旅立つ娘に対し、父親が言った言葉だ。魔女の子は13歳になると、一人前の魔女になるために、1年間の修行に出なければならない。13歳になった主人公のキキは、黒猫のジジと連れだって満月の夜に故郷を発

つ（『魔女の宅急便』より）。

2023年1月16日、フィールドワークを目的としたはじめての海外渡航に臨む。行きの機内での、なんとも言えない憂鬱さの理由は明らかだった。何かしらの「結果」をもって帰国しなければならないのだ、という重圧が重くのしかかっていた。

2ヵ月間のフィールドワーク中、私はこの

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

主人公に幾度となく共感せざるを得なかった。なぜなら、主人公とフィールドワーカーとのあいだには、共通の経験を見出すことができるからだ。

ひとつは、手助けしてくれる人々の存在だ。黒猫のジジ、パン屋のおソノさんとその夫、絵描きをしているお姉さんウルスラ、犬のジェフ、同年代の男の子トンボ等々。これらの人々の協力を得て、主人公は100分の映画のうちに何度も降りかかってくる困難を乗り越えていく。2つ目は、感情の起伏の激しさだ。主人公は作中、些細なことで気分が落ち込み、また些細なことで前を向くきっかけを得ていた。主人公が思春期の女の子であるということも関係しているだろうが、実際フィールドにおいても同じことが起こる。その一喜一憂を繰り返しながら、しかし確実に前へ進む姿が重なる。

今回の渡航の第一の目的は、「自分の調査地を決める」ということだった。入学して以来、自身の研究テーマを定められない期間が続いた。もちろん、調査地も決まらなかった。渡航の1ヵ月半前に現在のテーマが決まり、調査地として入りたいと思う場所が決まった。しかし、実際にその地を訪れたことがあるわけではないため、調査地に確信をもつための渡航でもあった。

自分の「フィールドを決める」。地域研究を専門とする研究者が行なう、重要な決断のひとつ。その過程に焦点を当てていこうと思う。

1月19日朝7時タイ王国チェンマイ県発のバスに乗り、西隣の県メーホンソン県クンユームに向かう。ここが、私が調査地とする

「予定」の場所だ。20日から3日間、「タイ日友好祭」なるものがあると聞きつけ、予定を変更し現地に向かうことにした。バスに揺られること8時間、15時にクンユームに着く。バスを降りて、ホストマザーが迎えに来てくれるのを待つ。ひとりバス停で待っていると、風がふいた。その風の感触で、あ、この町好きだな、と理由もなく思った。これが、クンユームとの最初の出会いだった。

その後一旦チェンマイに戻り、2月13日からメーホンソン県周遊1ヵ月の旅を開始する。この旅の趣旨は、第二次世界大戦で亡くなった日本兵のために建てられた慰霊碑を巡ることだ。

第二次世界大戦中の1941年12月21日、日・タイ同盟条約により、タイ政府は日本がビルマ戦線のためにタイ国土を通過することを認める〔市川1987〕。1944年3月、日本軍およびボース率いるインド国民軍は、インド東部インパールへ侵攻することを目的とした作戦、インパール作戦を実施する。しかし、戦略ミス、不十分な補給、相手側の新戦術、雨期の到来により、日本軍は撤退を余儀なくされる〔読売新聞社1980〕。その一部が、メーホンソン県に入り、チェンマイに向かった。その途中で、多くの兵士たちが息絶えた。現在、メーホンソン県各地に、戦争遺跡および、戦後建てられた慰霊碑やミュージアムなど、数々の戦争モニュメントが存在する〔早瀬2007〕。

今回、それらのモニュメントを訪れるため、チェンマイを出発しバスでメーホンソン県を周遊する計画を立てた。これらモニュメ



写真1 ランニング中の景色

ントと地元住人がどのように関わっているのか、ということをはっきりさせるのが本調査の目的だ。クンユアムに2週間、その他の都市メーサリアン、メーホンソン市、パーイに各4日間ずつ滞在した。

先に挙げた『魔女の宅急便』との共通点のひとつ目、手助けしてくれる人々の存在、は今回の調査において非常に大きかった。私が知る人も、私を知る人も、ほとんどいない都市をまわったからだ。調査は、住人の方の協力なしにはあり得なかった。

なかでも、クンユアムでの経験が印象深い。なぜなら、調査とは別に、関わったさまざまな人々が「この土地で生活する」ことを手助けし、教えてくれたからだ。

2回目に訪れたときは、まず宿探しからはじまった。1回目訪れたときにお世話になったホストマザーの家は、調査対象のモニュメントがある中心地から離れているため、新たに宿を探す必要があった。事前に予約すると高くつくので、現地入りしてから直談判すると決めていた。住人に安く泊まれる場所を聞



写真2 スア・ルンに使用する材料をすり潰す



写真3 揚げる直前のスア・ルン

いてまわった。結局、宿を決めるまでに3人の住人の世話になった。

あるときは宿探しのときにお世話になったクリーニング屋のお母さんと、ランニングをした。マラソン大会で何度もメダルをとっているほどの実力者だ。町の中心地から少し離れると、そこには田園風景とそれをぐるりと

囲む山々が広がっていた（写真1）。走っていると、この土地の地形がどうなっているのか、身体で感じることができる。これが、クリーニング屋のお母さんの生活の一部だった。

また、胃袋も完全につかまれた。クンユアムの人口のマジョリティを占めるタイヤイの人々の料理が美味しかった。1回目に訪れたときに宿泊したホストマザーの家では、実際にタイヤイ料理を作った。なかでもお気に入り、ヌア・ルンという肉団子だ。材料をすり潰すところから一緒に作った（写真2, 3）。

クンユアムが印象深い理由はもうひとつある。それは、この土地から新たに人の縁が繋がっていったからだ。1回目の滞在時に知り合った、タイ人日本語教師が手助けをしてくれた。次回メーホンソン県に来るときにはメーサリアンに立ち寄るという話をしたところ、彼女の友人がこの都市で同じく日本語教師をしていると教えてくれた。しかし、うかつなことに私はあまり重要なものとして記憶しなかった。

約3週間後、いざメーサリアンを訪れるも、調査が思ったようにいかず、不安が頭をもたげ始めていた。あきらめずに寺で僧侶に話を聞いていたところ、ある高校の近くには日本兵が埋められている場所がある、と教えてくれたので行くことにした。高校を訪問すると、日本語教師のもとへ案内された。私が改めて事情を説明しようとする、クンユアムのタイ人日本語教師の名前が挙げられ、彼女を知っていますよね、と言う。「クンユアムに日本兵のことを勉強している日本人の女の子が来た」という話が事前に共有されてい

たらしい。しかし、私は僧侶に言われなければこの高校を訪ねる予定はなかった。中心地からは少し離れたところにある高校だった。

結局、昔はこの近くに日本兵のお墓があったが、もうなくなってしまった、という。しかし、日本兵のことについて知っている人や野戦病院となった寺院に連れていってくれた。さらに、同僚の英語教師と共に通訳に協力してくれた。その後、夕食に誘われ、私たちはひとつの鍋を囲んでタイスキを食べた。必然か、偶然か。しかしこの素敵な縁を繋ぎに、またこの地を訪れたいと思うのだった。

『魔女の宅急便』との2つ目の共通点、感情の起伏の激しさについては、多くのフィールドワーク初心者の共感を得られるだろう。何か予定を入れていないと不安。予定を入れてさまざまな情報を得たはいいが、この情報をどうすればいいのだろう、とふと我に返り絶望的な気持ちになる。でも、次の日にまた新たな出会いや学びがあると、前向きな気持ちになる。この繰り返した。正直、自分自身の気分の不安定さには疲れることがあった。

フィクションでは、主人公が落ち込むと、別の登場人物が救世主のように出てくることが多い。現実、そう都合よく事は運ばない。それでもフィールドワーカーは、自分と向き合い、現地で出会った人と向き合い、それらをひっくるめて言葉を綴っていくのだと思う。その道を、まだ歩き始めたばかりだ。

本渡航の第一の目的は、「フィールドを決める」ということだった。はじめの直感、現地で人々と紡いだ時間が、私に確信させた。この私の気持ちを端的に表すものとして、

『魔女の宅急便』の最後のセリフを引用して終わることにしたい。

「お父さん、お母さん

お元気ですか。わたしもジジもとても元気です。仕事の方もなんとか軌道にのって、少し自信がついたみたい。落ち込むこともあるけれど、私、この町が好きです。」

引用文献

- 早瀬晋三. 2007. 『戦争の記憶を歩く—東南アジアのいま』 岩波書店.
- 市川健二郎. 1987. 『日本占領下タイの抗日運動—自由タイの指導者たち』 勁草書房.
- 宮崎駿監督. 1989. 『魔女の宅急便』 スタジオジブリ.
- 読売新聞社. 1980. 『昭和史の天皇 9』.

ブータンにおける古道の現代的活用とその可能性

—Shingtala Kezang エコトレイルを事例に—

菊 川 翔 太 *

はじめに

2022年9月から1ヵ月間、ヒマラヤの南麓に位置するブータン王国（以下、ブータン）に滞在した。首都のティンブーから車で2日離れた東部の村に滞在した。滞在の目的は、大学院での研究テーマを探ることだった。滞在先の村では農家でホームステイをし、仏教の儀礼に参加したり、農業を手伝ったり、村人に簡単な聞き取り調査をしたりしていた。

滞在も終盤に近づいた9月末のある日、地方都市タシガン（Trashigang）に用事があり行くことになった。午前中の作業が終わり、午後からは住宅街の観察のためひとりで

散歩にでかけた。15分ほど散策していると、少し前の坂から一本の道が山の方まで続いているのが見えた。その道のスタート地点まで向かった。“Shingtala Kezang Eco-trail”というエコトレイルであった。

その頃、慣れない異国の地での暮らしから早く日本に帰りたいと思うようになっていた。言語も通じない、研究テーマも見つからない。滞在先の農家や周囲の方からお世話になっているのに何もできない自分の未熟さを痛感していた。気持ちをリフレッシュしなかったからか、その道に引き寄せられるように登った。

1時間弱のトレイルはブータンでの日々を

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科